

「継承」の大切さ

私はこれまで嘱託職員として大森山動物園で勤務してきましたが、15年目を迎える今年、動物専門員として採用され、新たなスタートを切りました。担当動物は、アシカと、トラやライオンなどの猛獣、ミーアキャット、ワシミミズクです。アシカとは私が動物園に勤めてからの長い付き合いですが、猛獣は今年担当になったばかりです。

猛獣といえば動物園の人気者が多く、担当と聞いた時は驚きと不安がありました。見ている分にはとてもかわいいのですが、担当となると扉一枚の距離で、猛獣の息もかかれれば、大きな咆哮も腹の底に響いてきます。また、前任の担当者は担当歴14年のエキスパートで、当園の猛獣たちに長生きが多いのは、長年の経験と知識があったからこそだと思います。それを今度は私が引き継いでいくのだと思ったら身が引き締まる思いでした。

アシカは今年から新しい担当者が入り、人材育成中です。アシカのトレーニングは人と動物の信頼関係が非常に大切ですので、新しく入った担当者がアシカと良い関係づくりができるようサポートしています。

動物専門員になった今、動物園にとって知識や技術を継承していくことの大切さを改めて感じています。今後、動物園がもっと発展していけるよう、動物専門員として尽力していきたいと思っています。

飼育展示担当 千葉 可奈子



動物との信頼関係が大切です



これからよろしくね♪

人と動物、人と人をつなぐ

私は大森山動物園で17年間嘱託職員として勤務し、今年から新たに動物専門員として採用されました。今まで数多くの動物飼育に関わり、たくさんの動物の生と死を経験してきました。さまざまな職業がある中で日常的にこんなに命を感じ取れる場所はなかなかないと感じます。

飼育に正解はありません。自分が飼育員として取った行動でその動物が返してくれる行動が変わります。嬉しくて小躍りしてしまう日もあれば、やるせなさから落ち込む日もあります。そんな起伏の激しい日々の中で動物が健康的で生き生きとのんびりした時間を過ごしているのを見ると「ああ、自分のやっていることは間違っていないのかもしれない」と思わせてくれます。

人とのコミュニケーションも同じだと思います。私たちは言葉を交わしますが額面通りではない時もあります。人も動物も、相手のことを思いやり考えて接することが大事だと動物から改めて教えてもらえます。だからこそ、動物専門員として動物の魅力伝え、命のつながりを感じ、考えてもらえるよう努力したいです。そして、大森山動物園を動物と動物園スタッフのつながりをはじめ、地域住民や来園者、動物園に来られない方など、さまざまな立場の人と動物、人と人のつながりを感じ愛されるそんな癒やしの場所にしていきたいです。

飼育展示担当 堀籠 麻子



アフリカゾウのまんまタイム



フラミンゴヘエサやり

焦らず、ゆっくり関係築く

これまで嘱託職員として12年間勤務してきましたが、今年の4月から動物専門員として採用となりました。そして、初めてチンパンジーを担当することになりました。チンパンジーは知能が高く、高度なコミュニケーション能力を持っているため、接する時にはとても気を遣います。また、私のような新人に対しては、どんな人間なのかと警戒するようです。当園最古参のチンパンジーであるボンタ(オス49歳)は、外展示場から帰る時に、私が扉の開け閉め係をすると素直に入ってくれないことがほとんどです。「新人の言うことなんか聞かないぞ!」と言っているかのようです。

そんなボンタですが、最初はほとんど無反応だった朝の挨拶の時に、柵越しに指を出して挨拶を返してくれるなど、少しずつですが距離は縮まっています。今後も先輩の飼育員に学びながら、焦らずゆっくりと関係を築いていきたいと思っています。

また、学校向けに行っている教育プログラムの担当にもなり、動物園の役割の一つである環境教育について、より良いプログラムの構築などに思いを馳せる毎日です。これまで大森山動物園が積み上げてきたものを最大限に生かしつつ、自分の持ち味を生かし教育普及活動に貢献できるよう、全力で取り組んでいきたいと思っています。

飼育展示担当 館岡 幸枝



チンパンジーのボンタ



小学生向けの飼育体験で

動物病院から

カメの甲羅の裏側

一般の方はあまり見ることはできませんが、カメの標本から甲羅の部分だけを裏返すと、内側にぴったりと骨が背中にそって張り付いているのが見えます。この長い骨はカメの背骨です。カメはヤドカリのように甲羅を脱ぐことができません。カメを飼育している人でも「甲羅に背骨が張り付いているのですか!？」と驚く方はとても多いです。カメの甲羅は背骨が外側にできて発達してきたものと言われています。



カメの甲羅の標本

獣医師 川本 朋代

動物園では以前飼育していたケヅメリクガメのカメ子の標本の甲羅を見てもらうことが多いです。レプリカではなく、生きていたカメが背負っていたものであることにびっくりされますが、お客さんの中には、「オオハシ舎にいたカメさんだね」と覚えている方もいらっしゃいます。



甲羅の裏側

カメの甲羅の硬さ、重さ、手触り、そして裏側はどうなっているのかは、見て触って初めて分かります。動物園で亡くなった動物はすべて解剖し、どうして死亡したのか死因を調べた後に埋葬しますが、中にはケヅメリクガメの甲羅のように、標本として残す場合があります。動物たちが死ぬことは悲しいことですが、そこで終わるのではなく、彼らが生きた痕跡を残し、もっとその動物のことを知ってもらうために標本を作ります。園内の資料館にはさまざまな動物の標本が収蔵されていますので、来園した際はぜひご覧ください。